

第4次若狭町観光振興ビジョン（案）に関するパブリック・コメントの実施結果について

■意見募集期間 令和8年3月2日（月）から令和8年3月23日（月）

■意見の数 4名 : 11件

■意見と意見に対する町の考え方

No.	ご意見	町の考え方
1	<p>第3章 基本方針VI 周遊を促進する 施策① 周遊ルート、プランの開発</p> <p>若狭町観光振興ビジョン（案）では、「テーマ性を持った観光ルートや滞在プランの開発」が掲げられており、広域的な視点で自然、歴史、食、文化などの地域資源を組み合わせた周遊観光の推進が示されています。この方針をより具体的に推進するため、若狭湾地域の地理的特性と歴史資源を活かした広域観光コンセプト「WAKASADIVIDE（若狭分水嶺ルート）」の構築を提案します。この構想は、日本海（若狭湾）と琵琶湖水系を分ける中央分水嶺と、京都と若狭を結ぶ歴史街道である鯖街道を軸とし、京都（西ゲート）→鯖街道→中央分水嶺→三方五湖→若狭湾→敦賀（東ゲート）を結ぶ広域周遊ルートとして位置づけるものです。このルートは ・サイクリング ・モーターサイクル ツーリング ・ドライブ（観光・スポーツカー） ・ランニング ・トレイルランニングなど、多様なモビリティによる体験型観光を可能にするものであり、国内外で広がりつつある「ルートツーリズム」の考え方とも親和性が高いと考えられます。また、三方五湖の景観、若狭湾の海岸地形、鯖街道の歴史文化、水月湖年縞などの地域資源を一体的なストーリーとして結びつけることで、若狭町の観光価値を「海（湖）と山を走る若狭鯖街道の旅」という明確なテーマを持つ観光ルートとして国内外に発信することが可能になると考えます。</p>	<p>いただきましたご提案は、今後、具体的に観光ルート、滞在プラン等を検討する際に参考とさせていただきます。「WAKASA DIVIDE」というコンセプトや「海（湖）と山を走る若狭鯖街道の旅」というテーマは、今後の広域連携による周遊ルート造成やプロモーション戦略を構築する際の選択肢として検討を進めてまいります。今後、広域観光の推進に向けた関係機関との協議の場において本ご提案を共有し、実現に向けた議論を深めてまいりたいと考えております。</p>
2	<p>施策③ サイクリングルート/environment整備</p> <p>若狭湾サイクリングルートおよび三方五湖周辺のサイクリング環境整備については、今後の観光振興において重要な施策であると考えます。一方で、近年の観光トレンドでは、単なるコース整備にとどまらず、地域の自然・歴史・文化を結びつけた「テーマ性のあるルート」として発信することが、観光ブランドの形成において重要となっています。そこで、若狭湾サイクリングルートや三方五湖周辺のルートを、日本海と琵琶湖水系を分ける中央分水嶺と鯖街道の歴史を軸とした広域ルート「WAKASA DIVIDE（若狭分水嶺ルート）」というコンセプトのもとで発信することを提案します。このような明確なテーマ性を持つルートとして発信することで、単なるサイクリングコースではなく、地域の自然や歴史を体験する「旅のルート」として国内外に認知される可能性が高まると考えます。</p>	<p>現在、町では、サイクリストの皆様が安全・快適にサイクリングを楽しめるよう、まずは基盤となるハード面の環境整備を進めている段階ですが、今後は、ご提案いただいたような魅力的なコンセプトを基にしたプロモーション戦略、いわゆるソフト事業の強化が不可欠となります。いただきましたご意見を参考に、今後の情報発信やブランディング戦略を検討する上で参考にさせていただきます。今後、関係期間とも連携を図る中で、本ご提案を共有し、より魅力的なルートづくりに向けた議論を深めてまいりたいと考えております。</p>
3	<p>「熊川宿関所から美浜町国吉城への街道」 京都から熊川宿に入った織田信長軍が美浜町佐柿の国吉城へ入軍した。旧丹後街道を通ったと思われる。その歩いた道を調べ（約3万の兵士）観光にいかされないか。</p>	<p>織田信長の行軍ルートという歴史的ストーリーに着目したご提案は、計画に掲げる「地域資源のストーリーの整理」を具体化する上で参考となるものです。ご提案のルート活用については、史実調査や関係自治体との連携が不可欠となるため、今後の広域観光施策を検討する際の参考とさせていただきます。</p>

4	<p>「上中地区 天徳寺の瓜割の滝」 天徳寺瓜割りの水を使い、わさびの栽培をしてはどうか。自然なわさ水を利用して環境負荷が少ない持続可能な農法で育てられるのではないかと。収穫したりして観光事業として開拓できないか。</p>	<p>瓜割の滝の水という地域資源を活用したわさび栽培と、それを活かした観光事業化のご提案は、特産品開発の具体的なアイデアとして参考になります。事業化にあたっては、栽培の適性調査や関係者との調整などが必要となりますが、今後の特産品開発を検討する際の参考とさせていただきます。</p>
5	<p>若狭町の地域を見渡すと、田舎にもかかわらず、自然に恵まれた場所が少ないように思われます。幼子から年寄りに至るまでの美しい自然を眺められる場所作りを考えてほしい。例えば、ハス川を整備し土手道に桜の木を縄文公園の所からみそみ小学校の所に植えると、今すぐにはなくても数年後には素晴らしい桜並木がみられるのではないのでしょうか？そのようなハス川を整備は必須で昔のような鱒の川のぼりもみられるのではないのでしょうか？水不足もありますが「美しい川。美しい自然」とは到底言えず、程遠い気がします。</p>	<p>美しい自然景観の創出や河川を整備に関するご提案は、本ビジョンで目指す「里山里海湖の保全」の具体的な取り組みとして参考になります。河川を整備につきましては、河川管理者等の関係機関との調整も必要となりますが、観光客だけでなく、地域の皆様が親しめる身近な自然環境づくりを進める上で、貴重なご意見として今後の施策の参考にさせていただきます。</p>
6	<p>本ビジョン案は、若狭町が直近で抱える「認知度の低さ」「宿泊者数の減少」「低い労働生産性」といった課題を正確に把握している。しかし、提示された施策は依然として「行政の努力目標」の域を出ておらず、衰退する地方経済をV字回復させるための「経営スピード」と「資本効率」の視点は深掘りの必要性を感じる。若狭町が「稼げる観光地」へ脱皮するためには、従来の行政主導プロセスのほか、第3セクターやSPC（特別目的会社）をエンジンとした「事業会社型」の観光経営への即時転換の必要性を提言したい。</p>	<p>ご指摘の「「経営スピード」と「資本効率」を高める「事業会社型」の観光経営」は、本ビジョンが目指す「稼げる観光地」の実現に不可欠な視点であると認識しております。本ビジョン案P.33～34の「専門組織」という記載には、ご提言いただいた第3セクターやSPC、DMOといった、経営視点を持つ専門的な推進母体の設立・活用を想定しております。今後、ビジョンを推進していく中で、どのような組織形態が本町にとって最も効果的か、具体的な検討を進めてまいります。</p>
7	<p>「通過型観光」による経済漏出（漏れバケツの状態）3つのICという強力なインフラがありながら、滞在時間は1時間未満（レインボーライン58.5分、熊川宿36.9分）と極めて短い。また、地域経済循環率が65.0%と県全体（91.2%）に比して著しく低い事実は、稼いだ外貨が町外へ流出している構造的欠陥を表している。「数」という指標への執着観光客数 240万人という目標は、現在のインフラではオーバーツーリズムと行政コスト増を招くことを危惧する。欧米市場（中国・台湾より1人あたり消費額が10万円以上高い）へのシフトを掲げながら、数に固執する矛盾解消が必要。</p>	<p>町外から「外貨」を稼ぎ、それを地域内でいかに循環させるかは、本ビジョンが目指すべき最も重要なテーマであると認識しております。いわゆる「漏れバケツ」の状態を改善し、町外に流出している消費をいかに地域内に留めるかが、持続可能な観光地経営の鍵であると考えております。まさにその課題意識から、本ビジョンでは、観光地経営の最重要目標（KGI）として「観光消費額」を掲げました。これは、これまでの「観光客数」を重視する考え方から、地域の「稼ぐ力」そのものである「滞在時間の延長」と「一人あたり消費単価の向上」を重視する姿勢へと、明確に舵を切る意思表示でございます。ご懸念の「観光客数」の目標値につきましては、この「観光消費額」を構成する要素（KPI）の一つとして位置づけております。ご提言いただいた高単価な欧米市場へのアプローチ強化や、滞在コンテンツの充実によって「質」を高めた結果として、持続可能な範囲で達成を目指す指標と捉えております。観光客の満足度と住民生活の調和を図りながら、本町が「稼げる観光地」へと質的転換を遂げられるよう、本ビジョンの推進に努めてまいります。</p>

8	<p>第3セクター・SPCを活用した「超速」の事業推進行政は「環境整備」と「ルール作り」に専念し、実事業は機動力のある専門組織へ委譲し支援すべきである。</p> <p>提言：第3セクターが自ら収益事業（直営店、地域OTA運営等）を行い、利益を即座に再投資できる独立採算モデルを確立すること。これにより、行政特有の意思決定の遅れを排除する。</p>	<p>ご指摘の考え方は、本ビジョンが目指す「稼げる観光地」の実現において極めて重要であると認識しております。</p> <p>本ビジョン案P.33～34の「専門組織」は、まさにそのような、収益事業と地域への再投資を担う経営主体を想定したものでございます。</p> <p>今後、ビジョンを具現化していくフェーズにおいて、本町の実情に最も適した組織のあり方や、行政との効果的な連携スキームについて、具体的な検討を深めてまいります。</p>
9	<p>幹線道路・IC周辺の「戦略的収益拠点」の開発「素通りされる町」から「立ち寄りざるを得ない町」へ、物理的な動線を作り変える。</p> <p>提言：IC周辺および主要幹線道路沿線を「観光投資特区」と位置づけ、民間の飲食店・商業施設の出店補助や、公設民営方式による体験型拠点の建設を最優先で実行することが理想的。</p>	<p>お客様を町内に引き込み、滞在・消費を促す魅力的な拠点を交通の要所に整備することは、不可欠な戦略であると認識しております。</p> <p>まずは、本ビジョンの計画期間である今後5年間で、P.26に記載の通り「商業施設の整備」や「飲食店等の出店支援」などを通じて、民間事業者様と連携しながら魅力的な拠点の創出に取り組んでまいります。</p> <p>ご提言いただいた「観光投資特区」のような、土地利用と一体となった開発構想につきましては、より長期的かつ町全体の視点が必要となるため、令和8年度に策定予定の「まちづくりマスタープラン」と連携させながら、その実現可能性を具体的に検討していくことが最も効果的であると考えております。</p> <p>いただきましたご提言を重要な視点として、短期的な支援と長期的な計画を両輪で進め、戦略的な拠点開発を着実に推進してまいります。</p>
10	<p>「城内調達率」をKPIの主軸に据える地域経済を潤すためには、消費の「総量」ではなく「町内残留率」も重視すべきである。</p> <p>提言：宿泊施設や飲食店の町内産食材利用率を数値目標化し、達成者へのインセンティブ等を付与する。また、地域OTA「漁師の宿帖」の利用を徹底し、参画宿の導入支援補助等を行う</p>	<p>ご提言いただいた「町内残留率」および「町内産食材利用率」の向上は、本計画がP.18で掲げる「漁業・農業・飲食業等の他産業への経済効果波及と、地域経済全体の活性化」という目標を達成するための核となるものと認識しております。</p> <p>具体的な施策としましては、まず「町内残留率」の向上について、P.26に記載の地域OTA「漁師の宿帖」の活用を観光協会を中心に推進してまいります。これにより、これまで地域外へ流出していた予約手数料を地域内で循環させ、新たな観光振興の原資とすることで、ご指摘の経済循環を創出してまいります。参画事業者様への支援についても、今後の事業展開の中で検討を進めます。</p> <p>また、「町内産食材利用率」の向上につきましても、既存の飲食店支援策と連携した効果的な手法を研究してまいります。そして、この方針をより明確に示すため、ご提言を受け、P.26「飲食店等出店支援」の項目に「町内産食材の積極的な活用を促進する」との一文を追記いたしました。</p> <p>いただいたご意見を計画の重要な指針とし、実効性のある施策として力強く推進してまいります。</p>

<p>11</p>	<p>労働生産性の向上と「高単価・長期滞在」への完全シフト</p> <p>提言：低収益なマス観光より、欧米富裕層等のターゲットに特化した「高付加価値プログラム（年縞や鯖街道の没入体験）」へ資源を集中投下すること。これにより、観光業の労働生産性（製造業の1/3）を改善し、住民の所得向上へ直結させる。</p>	<p>ご提言いただいた、欧米富裕層等をターゲットとした高付加価値観光へ資源を集中投下すべきとのご意見は、本ビジョンが目指す方向性と合致するものです。</p> <p>P. 6に「長期滞在や高消費によって地域経済への貢献がより大きく、かつ成長のポテンシャルを秘めた欧米市場を主要ターゲットとして明確に設定し、限られた資源を集中投下することが極めて重要である」と記載しており、この方針を計画の柱としております（P. 18にも同趣旨を記載）。</p> <p>具体的な施策としては、ご提言いただいた「年縞や鯖街道の没入体験」のような高付加価値プログラムの開発を、P. 25「自然・歴史・暮らしを活かした体験型コンテンツ開発と実施」や、P. 30「テーマ性を持った観光ルート、プランの開発」の中で具体的に推進してまいります。</p> <p>これらの取り組みを通じて、ご指摘の観光業における労働生産性を高め、住民の皆様の所得向上に繋がっていきます。</p>
-----------	---	---